
めまいを感じるこの世界

神崎ミキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

めまいを感じじるこの世界

【ZZマーク】

ZZ8929S

【作者名】

神崎ミキ

【あらすじ】

階段に終わりはあるのか……そんな当たり前のような疑問を、ある絵を見て思わずにはいられなかつた。

絶望、恐怖、狂氣、不安、孤独。

その全てがそこにはあつた。

あの終わりの見えない螺旋の階段。

僕にはそれが人生そのものに思えた。

延々と登り続けるだけで先はみえない。

登るべき上を見上げても、今まで登ってきた下を見ても……そこには『めまい』がする様な景色しか有りはしなかつた。

チャイムが鳴る。

キーンゴーンカーンゴーンと重つあつたりで平凡な音。
どうやら授業が始まるらしい。

僕はのそのそと足を教室に向けて進める。

正直面倒臭い。

もういつか、サボつてしまおつかとも思つたが、それはそれで面倒臭い。

生きる事事態面倒臭い。

でも、死ぬなんて出来る質じゃないので、嫌々ながらも生きている。
足を進める。

そして立ち止まる。

教室は二階、ここは一階。

教室に行くには、どうしても階段を登らなければいけない。
エレベーターだなんて都合の良い物は無いのだから。

僕は目の前にある階段を見て、溜め息をつく。

抜けないトンネルは無い、明けない夜は無い……そんな言葉を偶に耳にするが、僕はこれに素直に肯定する事が出来ない。

そこがトンネルだと誰が言ったのだろう……進んだ先が行き止まり

かもしだれないと何故不安にならないのだろう。

そこが、夜が空けても光が照らない延々と続く洞窟だと何故考えもしないのだろう。

先も周りも見えないのに、どうして終わりがあると決めつけられるのだろう。

もしかしたら……この階段も、終わりが無く延々に続いている可能性も無きにしも非ずなのだ。

そんな思考に発展した僕は、階段を登るのを止め、手元にある鞄から一冊の画集を手に取った。

『レオン・スピリアールト』
とあるベルギーの画家の画集。

その、おそらく聞いた者の大半が誰だと頭を傾げるであろうスピリアールトの絵に……僕は惹かれたのだ。
運命の悪戯の様に。

今から七年前の十歳の時に。

切っ掛けは、本当になんとなげだつた。

暇で暇で時間を持て余してた僕は、偶々地面の方に目線をやり、キラリと光る何かを見つけた。

五百円玉だ。

当時小学生の僕からしたら大金。

僕は五百円を左手に握り、先程同じく偶々貰つたチラシに書いてあつた美術館へと足を進ませた。

理由は簡単。……暇だつたからだ。

時間は有限だと言つが、その時の僕には無限に思えた。

趣味も無い、勉強に励む気も、運動をするやる気も無い。

ゲームや漫画にも、今一興味が持てなかつた。

結果、僕にはする事もしたい事も無く暇なのだ。

友達なんてモノもないし、両親もほとんど家に帰つて来ない。

独りの時間をただただ消費するだけの毎日。

だから、こんな見た事も聞いた事も無い画家の展覧会なんかに足を

運んでまで時間を潰すなんて不毛な選択をしてしまった訳だ。

僕は氣怠げに美術館に入り入場料を払った。

大人は五百円、小人は三百円。

……僕は何も言わず五百円玉を置いて、入り口を通過した。

そして、さして興味も無かつたので館内をぶらぶらと歩く。宛ても無く。

……で、適当に足を動かす事に疲れた僕は、ドテンと腰を落として座り込む。

そこは道の真っ直中で、周囲の大人は、なんて非常識な子供なんだと言つ目を僕に向ける。……僕にはどうでも良かつたけど。

両手を後ろにつき、もたれ掛かるような姿勢になり、思わず上を見上げた。

そして 目を奪われた。

身体を動かす事も、瞬きも、呼吸も……全てを忘却してしまう程の魅力がそこにはあった。

そこにあつたのは一枚の絵。

そこには『めまい』。

それはもう……氣を喪つてしまいそうな程。

白と黒で作り出された世界……他の色など入り込む余地が無い。

そんな世界にあるのは幾重にも重なつた螺旋状の階段。

その先の見えない白と黒のコントラストが激しい階段に一人の女性が足を置く。

彼女は、身に纏う黒い布をはためかせ、それはつきりと見ない目で下界を見下ろす。

そこから見える景色は闇……いや、どこまでも果てなく続く黒の砂漠。

希望など微塵も感じさせない絶望の景色。

彼女はこの階段を登つているのだろうか？

降りているのだろうか？

それとも……その背後に広がる闇を前に立ち止まつてしまつたのだ

ろうか？

孤高で孤独なその姿に僕は息を呑む。

その音が、いやに良く聞こえた。

本来あるべき彼女の影は、螺旋へと呑み込まれて先が見えない。一体この女性は、どれだけの時間を費やし、どれだけの階段を登ったのか。

もし、そこが頂上までもつしだといつ可能性を含んでいたとしても、それに何の意味があると言うのか。

登りつめたとしても、そこには何も無く……かと言つて、降りたところで、やはり何も無い。

だから、その階段には終わりは無い。

足をかけてしまった時点で、逃れることは出来ない。

それは……まるで人生の様だった。

登ろうが、降りようが、そこには何も無い。

絶望、恐怖、狂氣、不安、孤独……全てを巻き込み、そこにあるのただただ『無』。

その何も無い世界に僕は、眩暈を覚えた。

世界が揺れた。

見える世界が歪んで変わった。

……その時の事は七年たつた今でも覚えている。

忘れるはずが無い。

僕は、画集をパタリと閉じて鞄にしまう。

そして、階段に向かい合い、一步と足を一段目に乗せる。

この階段には終わりがあるかもしれないが、それは錯覚だ。

その終わりには何の意味も無く、否が応でもそこから先に進まなくてはいけないのだ。

先の見えない、砂漠の中の螺旋の階段を。

登る事に意味は無く、降りる事にも意味は無い。

生きる事にも意味は無いし、死ぬ事にもやはり意味は無い。だからこそ、僕は今日も無意味に生きる。

(後書き)

なんか……テーマに合っているかなと、書き終わってから不安になりました。

どんな絵か分からぬ方は、ぜひ検索を。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8929s/>

めまいを感じるこの世界

2011年10月6日10時44分発行